

令和4年度 (気仙沼支援) 学校の研究概要 ～令和5年1月末現在～

運営委員氏名 (小野寺 由紀)

研究テーマ	「個々の目標達成に迫るための指導・支援の在り方」 ～PDC Aサイクルでの授業実践を通して～
研究目標	児童生徒一人一人の適切な実態把握と、学習指導要領を踏まえた授業づくりや授業実践、学習指導要領を踏まえた教育課程の検討や授業評価を通して、個々の目標達成に迫るためのよりよい指導・支援の在り方やよりよい授業づくりを目指す。
研究の内容と方法	1) 研究期間：3年間（本年度3年次） 2) 本年度の取組 (1) 新学習指導要領に基づいた授業づくり 新学習指導要領の目標・内容一覧を整理した「内容一覧表」を参考に設定した一人一人の個別の目標を踏まえ、学習グループごとに授業の単元計画を立てたり、1単位時間の学習過程を考えたりしながら、目標達成に向けた授業実践を行った。 (2) 「授業づくりのポイント」に基づいた授業評価の実践と授業改善 付箋紙を用いた授業評価を昨年度から継続して実践した。他学部の教員も参観及び評価を行ってよいこととし、研究研修部から「よりよい授業づくりのポイント」を示して、効果的な授業評価と改善を積み重ねられるようにした。 (3) 個々の児童生徒の学習の蓄積 個々の「内容一覧表」に、達成(○)または継続指導(△)を記入し学習状況を蓄積することで、各教科・領域の学習段階を正しく把握できるようにした。 (4) 研修会や他学部見学の実施 知障専の研究協議を視聴し、「みやぎ授業づくりガイド」の活用法を学んだ。
研究の概要 ・研究経過 ・研究成果	<研究経過> 1年次は「新学習指導要領に基づく授業実践」「ファイル回覧による授業評価」「内容一覧表の作成」「教育課程の見直し」を柱として研究を進めた。また、Vineland-IIや重度重複障害児のアセスメントチェックリストによる児童生徒の実態把握を行った。 2年次は、「新学習指導要領に基づいた授業づくり」「授業評価の在り方について改善と実践」「個々の児童生徒の学習の蓄積」を柱に進め、特に評価は、「毎時間の付箋紙記入」に変更し、改善点を次の授業に即生かすというスタイルを確立した。 3年次である本年度は、よりよい授業づくりと評価の充実、学習の確実な蓄積を研究の中心に据え、2年次の内容をより強化、充実させて研究を進めた。特に、指導と評価の一体化をより一層図るため、児童生徒の振り返りから「学び」の状況を的確に捉えながら、本校独自のPDC Aサイクルをしっかりと回し、個々の発達段階に合った授業づくりや系統性のある指導・支援の在り方を確立した。 <研究成果> 教育課程については、学部ごとに指導内容の洗い出しを行い、新しい内容を、どの教科(領域)のどの単元(題材)に組み込むのか、または、新しい単元(題材)として起こすのかを話し合い、年間の指導計画に反映させることができた。 授業づくりにおいては、内容一覧表を参考に、個別の指導計画の目標や手立てを設定したり、個々の学習の蓄積を行ったりすることを通して、全教師が学習指導要領に確実に触れ、理解する機会を多くもつことができた。また、授業評価については、付箋紙による評価と改善を積み重ねることで、1単位時間ごとの授業におけるPDC Aサイクルがしっかりと回り、単元や題材を、ひいては年間計画のサイクルを回すことにつながった。このように、複数の目で学習指導要領と授業内容を繰り返し検討したり、有効な支援方法を各自の実践に取り入れたりすることで、授業力の向上を図ることができ、学部内の横のつながりや学部を越えた縦のつながりを強め、組織としての教育力を高めることにつながった。 授業実践については、各教師が「よりよい授業づくりのポイント」を意識して、実態に応じた指導過程や具体的な手立てを検討したり、個々に適した教材・教具を準備したりすることで、児童生徒は学習に必要性を感じながら課題に取り組んだり、課題解決に向けて自分なりに学習を進めたりできるようになった。

(支援学校研究報告様式)